

ハチャトゥリアンの『剣の舞』と  
ドヴォルザークの『新世界より』東京大仏 乗蓮寺 住職  
若林 隆壽

東京フィルゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第19回は、住職として寺院を運営しつつ、長年、災害被災地やフリースクール等の支援活動に携わっておられる若林隆壽様です。後援会員として東京フィルをご支援くださっています。小学生時代のお父上との思い出を綴ってくださいました。



1963年2月、旧ソビエト連邦の作曲家、アラム・ハチャトゥリアンが、名ヴァイオリニストのレオニード・コーガンと共に来日し、自身の作品を自ら指揮するというコンサートが開かれました。61年4月に開館したばかりの東京文化会館で、(記憶に間違いがなければ)アンコール曲として演奏されたのが、バレエ『ガイヌ』最終幕の楽曲『剣の舞』でした。圧倒的なスピード感はもちろんのこと、まだ小学2年生だった私が見惚れたのはハチャトゥリアンのダイナミックな指揮でした。その日を境に頭の中には『剣の舞』が鳴り響き、タクト代わりの菜箸を、両親があきれられるほどに振り続けていたことをはっきりと覚えています。生の指揮と演奏とを、父と並びの席で目の当たりにした瞬間が、クラシック音楽との出会いだったのです。

次のエポック・メイキングは、1964年3月に我が家にステレオがやってきたことでした。64年はアジアで初めての、前回の「東京オリンピック」が開催された年であり、当時は1ドル=360円の固定相場制で、海外もそしてステレオもまだまだ遠い存在の時代でした。

その時父が買い与えてくれたのは、セントラル・パークを背景に聳え立つ摩天楼が未知の世界への憧れをかき立てるジャケットの、

小学生の時から60年近く大切にしてこられた、ドヴォルザーク『新世界より』、スメタナ『モルダウ』のLPレコード。ラベルの「ステレオ・フォニック」の文字が、往時の「ステレオ」の目新しさを物語っています。



ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団演奏、ドヴォルザークの交響曲第9番(当時は第5番)『新世界より』のLPでした。レコード盤に慎重に針を置き、左右のスピーカーの中央に座って演奏の開始を待ちます。

第1楽章、郷愁に満ちたチェロの旋律から印象的なホルンの主題、第2楽章の「家路」、第3楽章の情熱的なスケルツォを経て、トランペットとトロンボーンによる壮大な第4楽章へと向かう高揚感。その時覚えた全宇宙を前に独り立ったような不思議な感覚は、幼いながらも深く心に刻まれました。

私が育った浅草の寺は、1945年3月の「東京大空襲」で灰燼に帰し、戦後は全くのゼロからのスタートでした。1956年の生まれの私は本当の苦しい時期を経験した訳ではありませんが、そんな境遇でありながら、少年時代から優れた音楽に触れる機会を与えてくれた父には今でも感謝しています。

私が20年以上東京フィルの後援を続けている一番の理由は、毎年8月15日の「終戦記念日」に「家族で平和を考える」をコンセプトに開催される「ハートフルコンサート」、とても解りやすい『楽しいオーケストラ図鑑』(小学館)の発行、さらに、青少年対象の巡回公演など、子どもから大人まで楽しめるプログラムが充実していることにあります。今後も、小さいうちから「本物」を聴くことのできる場を提供し続けていただきたいと思います。

若林隆壽(わかばやし・りゅうじゅ) / 1956年東京生まれ。東京大仏乗蓮寺を始め4ヶ寺の住職。浄土宗特任布教師。浄土宗総本山知恩院顧問。大本山増上寺布教師会常務理事。一般社団法人茶道裏千家淡交会東京第二東支部支部長。公益財団法人鎌倉能舞台理事。防災士。趣味は写真撮影(柴田昌勝門下)。

乗蓮寺の東京大仏は、悲惨な戦災や震災が起きないようにとの願いを込めて、1977年4月に建立された露座の大仏(阿弥陀如来)。東京都選出の「新東京百景」の一つ。